

令和7年度 授業改善推進プラン <音楽科>

大田区立大森第十中学校

○音楽科における令和6年度授業改善推進プランの検証

取り組みにおける成果と課題

■成果

○知識を技能として応用する力の育成。（知識・技能）

→合唱の練習では、表現方法の工夫についてリーダーが中心となり教え合い、学び合っていた。

○目標に沿った学習課題の定着（思考・判断・表現）

→常に目標を意識させることで学習内容が明確化し、身に付けるべき力を生徒に理解させることができた。

○主体的な表現活動の充実（主体的に学習に取り組む態度）

→話し合い、教え合いの時間を確保し、学び合い高め合う姿が見られた。

■課題

- ・知識の定着が定期考査のための学習になってしまっている。
- ・自他の意見を受け入れ、発信することで多様な考えを学ぶという意欲をもたせることができていない。

○音楽科における観点別の分析

■「知識・技能」

- ・読譜力、音価の理解が定着しつつある。
- ・音符などの音楽記号を名前として覚えているだけで、記号がもつ意味を理解できない。
- ・1つの単元で学んだ知識や技能を他の単元に生かすなどの応用ができない。

■「思考・判断・表現」

- ・音楽がもたらすイメージや情景、作曲者の思いを感じ取ることができるがその根拠を探ろうとする探究心が持てない。
- ・曲や演奏に対する評価とその根拠について考えることができるのは少数の生徒に限る。
- ・自分の考えた音楽表現を、相手に伝えたり発表したりすることが苦手である。

■「主体的に学習に取り組む態度」

- ・前時の学習の学びを生かして、様々な音楽に興味をもっている。
- ・苦手な活動に対して、諦めるのがはやい。
- ・曲想を感じ取りたいという意欲は感じるが、曲想を作り出している音楽の構造に興味関心をもつ生徒が少ない。
- ・自分たちでよりよい演奏を作るという意欲がやや欠ける。
- ・楽譜や教材を自ら読み取ろうとする力が足りない。

○分析に基づいた授業改善のポイント

1 知識を技能として応用する力の育成。（知識・技能）

→ 楽譜の中にある音楽記号が、書いてあるから表現するのではなく、作曲者がなぜその場所に音楽記号をつけたのかという意味を考えさせる。得た知識を試行錯誤していきながら技能として身につける姿勢を学ばせる。

2 一人一人が自信をもって表現することができる環境作り（思考・判断・表現）

→ 生徒の習熟度、感じたことを言葉にする能力に差があるため、生徒達で教え合い、話し合う時間を設けることで、深い学びの場を作る。学び合いをする中で発見できるものがある楽しさを伝える。創作の活動では、ICT機器を積極的に使用し、楽器になじむことができない生徒も音を出すことが楽しめる環境を作る。

歌唱や器楽では、身に付けた技能を生かし、創意工夫した表現方法を生徒同士で話し合わせることで、自ら課題を見つけ解決する達成感を味わわせる。

3 主体的な表現活動の充実（主体的に学習に取り組む態度）

→ 教師は、基礎的な技能を身に付けさせ、表現は生徒の話し合いの中で見つけさせていく。

パート毎に聴き合うなどの活動をし、自分たちで改善策を模索させる。

授業の目的を明確に伝え、目標に対する達成率を振り返ることで、身につけた力を実感させる。

○音楽科の授業改善策

第1学年

- ・基礎的な知識・技能を身に付けさせる。
- ・音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度を育てる。
- ・話し合いの場を多く設け、対話的な活動を行うことで、他者の意見を取り入れ、学習をより深いものにする。

第2学年

- ・知識を応用するために、鑑賞のみならず、歌唱の際も作曲の背景を学ばせる。
- ・曲種に応じた発声や言葉の特性を理解してそれらを生かせる表現力を身に付けさせる。
- ・他者の意見を聴くことで、音楽の多様性に気付かせる。

第3学年

- ・基礎・基本の再確認を行い、知識・技能を生かし生活の中で楽しむ能力を育てる。
- ・声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して、表現を工夫させる。
- ・生徒同士で意見を出し合い協力することで、他人と協働する難しさ、楽しさを学び、生活に生かす能力を身に付けさせる。